

Nathanael West と「成功への夢」

——*A Cool Million* 解釈の試み——

平野 信行

I. Nathanael West の評価

生前はほとんど問題にされなかった作家が、死後あるきっかけで急に評価され始める場合が時折あるが、Nathanael West はその典型的な例と言ってよいだろう。1931年に処女作 *The Dream Life of Balso Snell* を公にして以来、1940年のクリスマスも間近というときに自動車事故で不慮の死に会うまで、彼が世に出した小説はわずか四つ、他に新聞、雑誌に書いた短い文章が四篇ばかり、これが彼の作家活動のすべてである。彼が書いていたときが1930年代という不景気の時代であったこともマイナスの要因として作用したかもしれないが、West の作品の評判は芳しくなかった。わずかに第二作目の *Miss Lonelyhearts* が好評であったのみで、処女作は500部限定で問題にされず、三作目に当たる *A Cool Million* は不評でゾッキ本扱いにされ、最後の *The Day of the Locust* は1500部足らずしか売れなかった。作品の出来栄からすると、Hemingway, Fitzgerald, Dos Passos, Steinbeck 等、1920年代、30年代の代表的作家の作品に及ばないことは確かであるから、評判にならなかったのも当然かもしれない。しかし、彼が評価されなかった理由は別のところにあったと思われる。その一は、彼の作品の舞台が時代の関心事とは一見無縁のところ設定されていたことである。Hemingway にしても Fitzgerald にしても、あるいは Dos Passos を考えてみても、彼らの意識の中心は1920年、30年代を出てはいない。それどころかこれらの年代を枠組にして、その中に生起する人間の心理、行動を活写しながら、彼らの存在の意義を問うている。一方 West はどうか。彼は紛れもなく1930年代の作家であるが、その作品には、この年代の一時期主流であった左翼的イデオロギー色はほとんど感じられないし、また彼の意識の中にも1930年代に対する危機感

は一部の作品を除いては希薄である。たとえば *The Dream Life of Balso Snell* は、トロイの木馬の尻の穴からもぐり込んだ主人公の奇怪な体験が綴られているのであるが、いかに dream life とはいえ、このような作品が貧窮に苦しむ 1930 年代初期のアメリカ社会に迎えられるはずはない。しかもこの作品に West が盛り込んだ技法は、良く言えば実験的だが、彼がそれまでに主として読書を通して得たことを未整理のまま投げ出している観が強く、同じ実験的といっても Dos Passos が *U. S. A.* にみせているそのような問題意識は感じられない。

評価を妨げた第二の理由は、West の作品にみられる sordid なイメージの多用である。彼は、性や排泄といった従来正視を避けてきた事柄をときに作品の中心に据え、こうした「汚穢」を隠して表面を繕って美化することこそが真の汚さであると主張しているとうけとれるのであるが、こうした主張は、第一次世界大戦を契機として 19 世紀ヴィクトリア朝のモラルを背景とする「お上品な伝統」(gentle tradition) を排撃したと言われる「失われた世代」の作家たちの攻撃する sordidness とはまったく異質であり、一般読者や批評家を戸惑わせるに十分であっただろう。しかしながら、皮肉なことに、West 評価の障害となっていたこれらの点が、やがて死後 20 年余りしてから彼の作品が俄に読まれるようになったとき、評価の対象となるのである。

1957 年に *The Complete Works of Nathanael West* が Farrar, Straus & Cudahy から出版された。Faulkner 評価の歴史と Malcolm Cowley の編んだ *A Portable Faulkner* の例を考えてもわかるように、ある作家の作品集の出版は彼の評価になんらかの刺激を与えることが多い。West の場合もそうで、この全作品集の出版がもとでと思われるが、翌年にはアメリカ作家の要領のよい紹介で知られるミネソタ大学のアメリカ作家研究に加えられ、1961 年には最初の本格的評伝が、James F. Light によって公にされた。以後今日まで、いわゆる West 研究書は大小合わせて 8 冊以上になる。このように急に West が評価されるようになったことについて、全作品集に序文を書いた Alan Ross は、レコードの A 面ばかり聴いていて、ふとした機会に B 面をかけてみると意外なおもしろさを発見することがある、と West に対するいわば「読まず嫌い」の傾向を指摘しているが、なかなか適評である。しかし、レコードにしても何にしても、別の面をとりあげてみようとするからにはなんらかのきっかけがあるはずだ。West が急に読まれ始めたことのきっかけを考えてみると、1960 年代に注目を集めるようになった Black Humorists の活動がクロス・アップされる。John Barth, James Purdy, Thomas Pynchon, Joseph Heller, Bruce Jay Friedman 等がこの中に数えられるが、彼らは、1950 年代の後半から 60 年代にか

けてアメリカの政治、経済の行き詰りを主因とする種々の危機意識を背景として、彼ら独自のイメージを縦横に駆使しつつ、アメリカ合衆国の意味、膨脹した巨大産業による人間性の矮小化といった点に批判の眼を向け、意図的に美化された現象面の裏に潜む醜悪さを徹底的に割り出して、白日の下に曝け出したのである。その際に彼らの用いた独自のイメージというのが、West の評価を妨げた sordid なイメージと共通する要素が多い。

West が sordid なイメージを多用したのは、彼の読書経験の中に Petronius, Arthur Machen, James Branch Cabell 等が入っていることから、これらからの借り物にすぎないとみることもあるいは可能かもしれないが、Black Humorists が批判の対象としたのが、ことさらに美化された表面に隠された醜い実態であるとするならば、性、排泄といった「常識」的には隠されるべき事柄を正面に据えることがかえって必要であり、必然であった。その彼らが Nathanael West を愛好し、彼の手法を作品に取り入れているのは当然であろう。

II. *A Cool Million* 評価の問題点

(i) Nathanael West の生涯と「成功への夢」

こうしてようやく陽の目を見るにいたった West ではあるが、代表作として挙げられるのは *Miss Lonelyhearts* や *The Day of the Locust* で、*The Dream Life of Balso Snell* や *A Cool Million* はほとんど問題にされなかった。前者は、文明の発祥に遡行して人間存在の意味を追求しようという壮大な意図は感じられるものの、作者の気負いが先走って、作品自体には粗さが目立ち、構成力が欠けているから、これが評判にならないのもやむをえないかもしれないが、後者はよりすぐれているし、種種問題点を含んでもいるので、もっと読まれてしかるべきである。とくに、1930年代を20年代にアメリカ社会が謳歌したかにみえる「成功への夢」の実現の無惨な破壊のときと捉えるならば、アメリカ国民の神話ともいえるべき「成功への夢」を完膚なきまでに叩き壊し、その空しさを証明してみせた *A Cool Million* を見逃すことはできない。また最近のアメリカが政治、経済、社会の種々の面に危機的様相を示し、それに伴って、かつての繁栄の日々、古き良き時代への郷愁と受けとれる1920年代の復活が顕著な傾向としてみられるとき、この20年代の繁栄が果して本物であったのかという問がしばしば発せられることを考え、この問への痛烈な解答としての30年代をそれに重ね合わせてみるならば、いまこそ *A Cool Million* を読み直すときであ

ろう。もちろん、Nathanael West が「成功への夢」批判を作品に盛り込んでいるのはこの作品に限ったことではない。というよりは、West の作品全体を貫くライト・モチーフがこの批判であるというべきなのであって、「成功への夢」批判に関連させて West を論じるのであれば、当然のことながら、彼の全作品をその対象にせねばならないが、ここではそれへの準備として、この主題ともっとも直接に取り組んでいると思われる *A Cool Million* に一つの解釈を試みようと思う。

A Cool Million を「成功への夢」批判という尺度で載る場合、考慮すべき点はいくつかあるが、それらを整理すれば、作者自身と「成功への夢」の関係および作品中での「成功への夢」概念の把握の二点に絞ることができよう。以下この順に従って検討してゆくことにする。

第一点の作者自身と「成功への夢」の関係で重要なのは、West がユダヤ人移民の家に生まれ育ったことである。というのは、何系であれ、移民であれば、なんらかの意味で「成功への夢」を持つものであるが、ユダヤ人移民の場合には、民族全体として離散の運命にあるだけに、「成功への夢」といっても、一個人、一家庭のそれに止まらず、いわば、ユダヤ人の楽土エルサレムの建設という悲願を背景とする夢だからである。その観点で West と「成功への夢」の関係をみると、一つ興味深い事実が浮かび上がってくる。すなわち、ユダヤ人移民といえばおおかた社会的、経済的に恵まれない人々であるのに対して、彼の家庭は比較的豊かであり、新天地に成功を求める必要はなかったのである。別言すれば、West は生まれながらにして成功の軌道に乗っていたのであり、このことと、*A Cool Million* その他に描き出している「成功への夢」を逆撫でするような対照的な捉え方との差をどう考えるべきかという問題がある。これに答えるには、彼の生涯を追ってみる必要があるだろう。

Nathanael West の生涯については大略は知られていたものの、なお細かい点で不明のところが多かったが、1970 年になって Jay Martin の手になる詳細な伝記が公にされることによって、それらが明らかになり、さらに新しい事実が追加され、いまでは West の全体像を把握することが可能になった。以下、主としてこの資料によって、West の生涯と「成功への夢」の関係を追ってみよう。

Nathanael West は 1903 年ニューヨークの生まれで親のつけた名前は Nathan von Weinstein Wallenstein である。父は Max (Mordecai) Weinstein, 母は Chana (Anna), 旧姓は Wallenstein という。すなわち、West は父母の姓を与えられたわけで、彼らの息子にかかる期待の大きさが想像される。あるいは、父母両家の誇りの表徴と言ってもよい。この期待ないし誇りは息子の肩に重くのしかかり、やがて彼は

それを振り捨てることになるのだが、そのことに触れる前に、アメリカ移民の前の彼の両親の状態についてみてみよう。

両親が住んでいたのは帝政ロシア政府治下の東欧リトアニア地方の小都市 Kovno である。帝政ロシア政府治下の東欧といえば、頭に浮かぶのは、ユダヤ系アメリカ作家の源と目される Yiddish 文学の母胎ともいうべき schlemiel や schlimmazl たち、当時の政府の圧制下に shtetl とよばれるコミュニティを作って、きわめて限られた生活を余儀なくされていた貧しいユダヤ人たちだが、West の両親の場合は、同じ東欧のユダヤ人でもこの部類には入らない。それは、両親とも家の職業が建築業であったという「幸運」に恵まれていたこと、彼らの住んでいた地域にはかなり自由な自治が許されていたことによる。当時のロシア皇帝はアレクサンダー II 世で、彼はユダヤ人に対して寛容な政策をとり、彼らの自治を大幅に認めた。しかも、当時建築の需要が盛んであったため、ユダヤ人は多く用いられた。皇帝自ら宮殿の造営にユダヤ人を使いもした。建築業は言うなれば皇帝認可の職業であった。こうした雰囲気の中に West の両親の家があったのだから、生活は豊かである。とくに、母方の家系は名家であり、なかでも祖父は高名な建築家として知られていたが、その下で仕事をしてきた職人の中に、やがて West の父となるべき若い建築家がいたのである。

このように、Wallenstein, Weinstein 両家は成功一途に進むかみえたが、やがて運命の急転のときがやってくる。アレクサンダー II 世の後を継いだ皇帝アレクサンダー III 世が、II 世とはまったく反対の政策を用いたのである。彼は、ユダヤ人の自治を廃止し、ロシア化を促進しようとはかった。Kovno 地区のユダヤ人の生活は俄に苦しくなった。あまつさえ、アレクサンダー III 世は、領内のユダヤ人の若者を軍役に徴用し始めたのである。ここにいたっては、もはやロシア領内に止まることを潔しとしないユダヤ人が次々に出てきた。West の両親の家もそうであった。1887 年から 88 年にかけて、Weinstein 家の息子二人がまずニューヨークに移住し、ついで他の兄弟たちもアメリカに移った。彼らはそこで建築請負会社を設立した。折からニューヨークは移民の増加に伴って建築の需要が大であったから、彼らの会社は景気がよかった。当時ユダヤ人移民の多くは貧しい生活をしていたのにひきかえ、Weinstein 家や Wallenstein 家は貧乏知らず、「成功への夢」ならぬ「成功の現実」を楽しんでいた。こうした恵まれた環境に生まれた West はどのような教育を受けたであろうか。

ユダヤ人の教育には重要な柱が二本ある。landan (学問) と chassid (信仰) がそれである。West の両親はとくに学問を成功の道と考え、息子の教育に並々ならぬ注意を払ったことがわかる。まず彼らは、自分たちは並の東欧からの移民ではないこと

を認識させようとして、Yiddish を使わずドイツ語を子供に教えた。また、読書についても気を配り、West が与えられたのは、Tolstoy, Turgenev, Pushkin, Dostoevsky, Thackeray, Dickens, Shakespeare といった「古典」であったが、注目されるのは、これらと同時に Horatio Alger の「立身出世物語」シリーズを読ませたことである。Horatio Alger といえば、いわゆる from rags to riches の「成功への夢」実現をテーマとした小説を 100 以上書いたことで知られるが、West の場合は rags はないのであって、彼が生まれたとき、家はすでに riches の状態にあったのであるから、さらに成功を夢みる必要はないはずである。それをあえて両親が Horatio Alger を勧めたのは、息子に寄せる期待の大きさを示すものであろう。こうした親の気持を West はどう受け止め、いかに応えただろうか。

結論を先に言えば、彼は名家の生まれという誇りと親の期待を痛いほど感じながら、一方ではそれらに反撥する気持を抱いていた。長ずるにしたがって、後者が次第に大きくなってゆき、ついに彼は自ら改名することによって期待と誇りを拒否するにいたるのである。その反撥の第一歩は彼の読書傾向に現われた。前述のように、West は両親から古典や立身出世物語を与えられ、読書好きの彼はそれらを貪るように読んだ。しかし、その一方で、親の眼からは望ましくない書物、たとえば Petronius の *Satyricon*, James Branch Cabell の *Jurgen*, Arthur Machen の怪奇小説などを読んだのである。しかも彼は、評価の定まった古典よりもむしろこれらのいわば「異端」の書に大きな興味を示したという。これらの書物を通して、彼は grotesque なもの、bizarre な事物に異常なほどの関心を示し、witchcraft, occultism, mysticism などに傾斜していった。このことは、West の作品を技法面から分析的に読む場合重要な意味を持つ、と同時に「成功への夢」という甘い糖衣に包まれた醜悪な泥濘を暴いてみせる彼の作品主題と密接な関係があると思われる。一方、両親との結びつきで考えると、彼は息子の将来の成功を期待する彼らに背を向けたことになるだろう。そして読書が家庭教育の重要な要素であることを思いあわせるならば、彼の読書傾向によって、彼らが息子の教育の二本柱と考えていた学問と信仰のうちの一本に罅が入ったことを意味する。この罅を大きくし、ついには柱を折るにいたるのが、学校生活に見せた West の態度である。名家の誇り高い両親は、息子を名門の誉れ高い公立 81 校に入れたが、彼は一学期中に欠席 30 回、遅刻 13 回という結果で父母の期待に応えた。これを反抗期の少年の行動として片づけるのは当をえまい。むしろ、両親の持っている伝統尊重主義や名門意識など、いわば conventional なものを排撃して、West 独自の世界を構築する足懸りを求めたものと解すべきであろう。そしてこの解釈に立

てば、処女作に見られる当時としては一風変わった作風も、以後の作品に一貫する成功に対する特異な解釈も納得できるのである。こうした convention 排撃のおそらく頂点にくるのが、彼自身の行なった改名であろう。

彼の名前は Nathan von Weinstein Wallenstein であるが、1926年8月13日に Nathanael West という現在われわれが知っている名前に変えた。しかもこれは筆名ではないことに注目したい。彼は Weinstein, Wallenstein という父方、母方の名前を拒否したのである。この改名について、彼自身は Horace Greeley が go west と言うのでそれに従ったまでのこと、とあっさりしたものだが、そんなに単純なことではなさそうである。というのは、go west とは、Horace Greeley の “Go west, young man and go up with the country” を踏まえてはいるものの、ここに現われているのは、westward movement を唱導するものであって、成功を示唆する言葉であるから、West がこれを額面通りにうけとって自分の名前にしたとは考えられないからである。それではわれわれはどう解すべきか。そこで浮かび上がってくるのが go west の別の意味である。go west には、to die とか to fail in business といった Harace Greeleyの言う go west とはむしろ逆の意味がある。もともと西部でカウボーイなどが使っていたもので、第一次世界大戦中にさかんに用いられるようになった。West と改名した後の作品内容と考えあわせると、Weinstein, Wallenstein から West への改名の裏にこの意味を考えてよいだろう。仮に、彼が Horace Greeley の言葉を文字通りにとったとしても、それは westward movement の精神としてではなく、せいぜい、西の方すなわちヨーロッパへ行くことぐらいではなかろうか。事実、彼は、改名後の同年10月から翌年1月初旬にかけて、当時新芸術運動の中心だったパリに赴き、そこで処女作を執筆しているのである。彼としては、作家として出発するにあたって何かを振り切る必要があった。その場合もっとも重荷になっていたのは Weinstein, Wallenstein という家名ではなかったか。そこで彼はそれを消し去って West とし、同時に過去の自己を go west (die) によって葬ったのであろう。以上に見た改名を頂点とする convention 排撃を背景として、次に *A Cool Million* における「成功への夢」についてみることにしよう。

(ii) *A Cool Million* における「成功への夢」

A Cool Million は正確には *A Cool Million or, The Dismantling of Lemuel Pitkin* といい、1934年に Covici-Friede から出版された。このタイトルにある cool とは without exaggeration or qualification (Random House Dictionary) の意味で、作

品の扉には、John D. Rockefeller would give a cool million to have a stomach like yours. という言葉がついている。大金持の Rockefeller も胃弱では財産の使いようがなく、健康な胃袋の持ち主の庶民を羨望の眼で見ているといった意味で、「成功への夢」を皮肉っている。

この作品を「成功への夢」の観点から分析する場合には、作中人物の相互関係、それと成功との関連を追うのが便利であるから、筋の展開に従いながらこの方法をとってゆくことにしよう。まず作中の主要人物を挙げると、主人公 Lemuel Pitkin, その母 Mrs. Sarah Pitkin, 女友達 Betty Prail, 元大統領 Nathan “Shagpoke” Whipple, 掏摸の名人 Sylvanus Snodgrasse 等がいるが、成功に関連して対照的な運命を辿るのは Lemuel Pitkin と Nathan “Shagpoke” Whipple の二人であるから、彼らに焦点を当てながら進むのが適当であろう。

Lemuel Pitkin (作品では Lem と呼ばれるので以下それにならうことにする) は、ヴァーモント州の小さな町で母一人子一人の生活を送っている。家は植民地風の室内装飾を持つ古風な造りであるが、事情があって抵当に入っている。また Asa Goldstein という室内装飾家が買い取りたがっている。家は status symbol であり、それも植民地風室内装飾の古風な造りとあれば、古い家柄を偲ばせる。それが他人の抵当に入っており、事と次第によっては流されるかもしれない、という設定で、主人公 Lem が成功を目差さねばならない準備がされている。この家で唯一財産らしいものは牛一頭、これさえも、Nathan “Shagpoke” Whipple (以下 Shagpoke と呼ぶ) により借金の担保にされているのである。彼は元大統領で、いまは Rat River Bank の頭取、大統領といえは from rags to riches の riches の頂点である。その彼がいまは田舎町の小さな銀行の頭取にすぎない。いわば、from riches to rags である。立身出世主義の諷刺とうけとれる。この彼は昔の夢をいまなお見続けており、アメリカは希望に満ちた国であるとの信念を持っている。それを彼は Lem に説き、都会へ出よと勧める。彼は Lem の指導者であり助言者の役を与えられているのだが、じつはこれがたいへんな役であることが次第にわかってくる。Lem は Shagpoke の話に感心して、cool million の夢を頭にニューヨークへ出かけてゆく、ここから先 Lem と Shagpoke は種々の事件で出会うが、Shagpoke が次第に自分の夢の実現に向かって着々と進むのに対して、Lem は逆の方向にゆくことが特徴的で、しかも Lem はその道具にされてゆくのである。

ニューヨークへ行く車中で、Lem は虎の子の 30 ドル (牛を Shagpoke に売った金である) を Wellington Mape という掏摸に取られ、代りに指輪に入れられる。こ

れがもとで Lem は宝石泥棒の疑いで投獄されてしまうのである。この Wellington Mape は後で Sylvanas Snodgrasse として Lem の前に再び現われることになる。投獄後、彼は刑務所に送られ、ここで所長により歯を抜かれ、冷水浴を強要されるという試練を経験するが、これがサブタイトルにある dismantling の開始である。ここで彼は Shagpoke と再会する。不況のため銀行が破産し、債権者に訴えられ投獄されたのだということである。彼は Lem に発明家になれと説く。アメリカ国民は獨創性豊かであり、この国は希望にあふれているのだ、というのがその主旨である。彼の当面の敵はウォール街のユダヤ国際金融資本家で、いまの憂き目は彼らのせいと確信しており、出所のあかつきには仕返しをと意気込んでいる。

疑いが晴れた Lem は、所長から盗まれた 30 ドルと入れ歯をもらって釈放される。その後憧れの街ニューヨークに出て、五番街の Asa Goldstein の店でわが家を見、懐旧の涙にむせぶ。そのとき、Asa の馬が突然暴れ出し、危くその蹄にかけられそうになった老人と娘を Lem が救うが、その際眼に負傷する。この老人は Mr. Levi Underdown といい、Underdown National Bank and Trust Company の頭取とわかる（頭取の名前が Underdown とは皮肉である）。そのとき、詩人と称する Sylvanas Snodgrasse なる人物が Lem の勇敢な行為を謳った詩を朗読し始めるが、この男じつは Lem の 30 ドルを拘り取った Wellington Mape なのである。彼が朗読している間に子分が集まった群衆のポケットから失敬するという寸法なのだ。Lem もまんまとやられる。あまりのことに気を失った彼は病院に運ばれるが、そこで右眼を取られ、かみ合わせがよくない歯は健康に悪いという理由で、入れ歯も取り上げられてしまう。dismantling の第二段階である。

病院を出た Lem はまた Shagpoke に会う。彼はあらい熊の帽子をかぶり、自分の理想は Andy (Andrew) Jackson と Abe (Abraham) Lincoln の昔に返ることであり、そのために National Revolutionary Party の設立が必要であると説く。そして、わけがわからずにいる Lem はその幹部にされてしまうのである。Shagpoke は同志を募るが、わずかにインディアンの酋長だという Jake Raven が応じたのみである。そこでいったん別れた Lem は Elmer Hailey という詐欺師の手先にされ、挙句に Wu Fong という中国人経営の売春宿に連れ込まれるのだが、そこで女友達 Betty Prail に会う。彼女は Tom Baxter という男に乱暴されかかるところを Lem に助けられるかにみえたが、彼が殴り倒されて、けっきょく Tom に犯され、そのあとここへ売られたのである。この店について作者は詳細な描写を行なっている。それによると、Wu Fong は、はじめ国際色豊かな部屋造りにして、世界各国の客の

好みに合わせていたが、Hearst 系新聞の Buy American Campaign に応じて、客の相手をする女性はすべてアメリカ人とし、彼女たちの部屋は出身の州に応じてその土地の特色を出すようにした。その装飾を一手に引き受けたのは、Lem の家を買った Asa である。彼がここへ引張り込まれたのは男色趣味の客の相手にというわけなのだが、いよいよというときになって、大声で助けを求めようと口を開ける拍子に入れ歯が飛び出し、眼を見開くと義眼が床に落ちて割れるという事件が起こり、客を仰天させる。すっかり腹を立てた Wu Fong は彼を放り出させる。彼は Wu Fong を告訴して売春宿の実態を暴いてやろうと意気込み、警官に訴えるが相手にしてもらえず (Wu Fong はこの地区の有力者である)、けっきょく、しつこい Lem に腹を立てた警官に署へ引張られてしまう。そこで彼を待ち受けていたものは、詐欺罪による逮捕であった。Elmer Hailey の件が発覚したのである。そこで種々経緯があって、けっきょく有り金を全部なくしてしまう。これから先のことを考えながら街をぶらぶら歩いていると、街娼に呼びとめられ、見ると Betty である。Lem が Wu Fong の店から放り出されるどさくさ紛れに逃げ出したのだ。再会を喜ぶよりも悲嘆にくれる彼を Betty は激励し、ともかくも Grand Central Station で寝ることにしましょうと言う。そこへ行ってみると、乗車券の行列に Shagpoke がいる。彼は革命党結成の資金作りに、同志 Jake Raven とカリフォルニアへ金鉱を掘りに行くところである。ゴールドラッシュは昔の夢、いま金鉱探しというのは妙な話で、このあたりにも作者の「成功への夢」の皮肉な見方を感じることができる。一行四人は一路カリフォルニアを目差すが、途中 Lem は Shagpoke の動きを見張っている第三インターナショナルという組織の人質になりかかるが、運よく自動車が事故で動かなくなり助かる。しかし手に負傷し、指を切断しなければならない。dismantling がさらに進んだ。ともかくも一行に追いついた Lem が Shagpoke に一部始終を話すと、彼は怒り、新党結成の決意をますます固くするのである。

カリフォルニアに着いた一行はキャンプを張って金鉱探しの準備を整えることになった。そこへ現われたのはミズーリ州 Pike County 出という男である。彼はインディアンを目の敵にしており、Jake を殺す機会を狙っている、と同時に Betty をものにしてやろうと機会を待っている。ある日、彼はこの二つをやった。すなわち、Jake を撃ち、Betty に襲いかかった。この現場を見た Lem は勇敢にも Betty を助けようとするが、所詮相手にならない。挙句に、この男が仕掛けた熊捕り罠にはまって脚をやられてしまう。その間に男は悠々と目的を達して、Betty をさらって逃げってしまうのである。一方射たれた Jake は、重傷にもめげず近くの部落に救助を求め

る。その酋長は Israel Satinpenny といって、ハーヴァード大学出身のインテリである。彼は、命令により集まって来た部下にいまこそインディアンが立つときであると説くのであるが、その中で、彼は、白人はインディアンから父祖代々の土地と自然を奪い、その代りに文明と文明病を与えた。しかしいまや白人自ら彼らの産み出した文明を持って余している、われわれは白人から押しつけられた文明を捨てねばならない、という趣旨のことを言う。そして、彼の出撃の叫びは「時計をつぶせ！」である。彼は、この演説で物質文明の有害なことを批判しているわけだが、これはちょうど、Shagpoke が Lem に発明の必要を説くのと逆の方向を示していることがおもしろい。しかし物質文明の害を言う酋長が部族に蜂起の合図を送る手段が狼煙ならぬ電報であるというのはいかにもおかしい。

Jake の訴えを受けて立った Israel は、罨にはまって動けない Lem を見つけ、その頭皮を剥いでしまい、ついでに義眼と入れ歯を奪って立ち去る。dismantling はさらに進んだ。そこへ Shagpoke がやってきて、Lem を馬に乗せ、医者のところへ急ぐ。手当ての結果命にかかわることはないことがわかるが、そのかわり、脚は切断されてしまうのである。歯から始まった Lem の dismantling は、眼、指、頭、脚と進み、いまや、彼はただ生きているだけの状態である。これから後の彼は次第に dismantling の完成へと向かってゆくことになるが、細かい出来事は省いて主な点のみを追ってゆくと次のようになる。

Lem の傷が回復するころには Shagpoke の資金が乏しくなったので、彼は Lem を見世物にして金を作ろうとする。しかしこの計画はうまく当たらない。次に彼らは Snodgrasse のショーに拾われるが、以前から彼を敵とみる Shagpoke は、巡業の先手で Snodgrasse 打倒の煽動をし、ために群衆は暴徒と化し、アメリカ国内のあちこちに暴動が起こる。その巻き添えで Jake がリンチの犠牲になるという事件を織り込みながら、話は終局に向かう。最後に Lem が拾われたのは Riley and Robbins という喜劇団で、彼の役どころは、二人がジョークをとぼしながら新聞紙を丸めて殴る相手で、殴るたびに、義眼や義歯、義足などが外れ、見物客を笑わせるという趣向である。芝居のはねたあととは、Lem は翌日彼が殴られる道具を作らねばならない。作りながら新聞を読んでいると、眼に映る記事は、Shagpoke の革シャツ党の相次ぐ勝利である。ある日彼は Lem の加わっている一座の興行している町にやってくるようになった。その支持がまだ十分でなかったからだ。そして、Lem は Zachery Coates と名乗る男から Shagpoke の依頼として演説原稿を渡され、Bijou Theater でそれを読んでほしいと言われる。Shagpoke の頼みとあっては断われず、彼は引き受け、

劇場に設けられた演壇で読み始めた。

I am a clown, but there are times even clowns must grow serious This is such a time. I……

そこまで読んだとき、銃声が起こり、彼の心臓を銃弾が貫通する。かくして Lemuel Pitkin の dismantling は完結するのである。Lem と Shagpoke の二人に焦点を合わせて話の筋を追った結果は以上の通りである。これを見てわかるように、Lem は Shagpoke に会う度に dismantle されているわけで、Shagpoke は間接的に手を貸しているのである。その目的はユダヤ国際金融資本家と労働組合の打倒に向けて彼が組織しようとする国家革命組織、革シャツ党のためである。してみると、哀れ Lem は彼の道具にすぎなかったのだ。彼は、まさに撃たれようとするとき、I am a clown と言うが、じつは、はじめから clown だったのである。Lem は銃弾によって殺されたが、*A Cool Million* はここで終わっていない。作者が最後にエピローグ的に付けている部分があり、そこに彼がこの小説で訴えたかったことが出ているように思われる。それは次の通りである。

凶弾に命を落した Lemuel Pitkin は、主義に殉じた英雄として尊敬され、彼の誕生日は国祭日になった。この日アメリカの若者は Lemuel Pitkin Song なる愛国歌を歌いながら行進する。それを Shagpoke Whipple が観閲台に立って閲するのである。そして彼は群衆にこの記念日の意義について大要次のような演説をする。

Lemuel Pitkin の生涯を振り返ってみるならば、まず監獄に放り込まれ、次に貧乏のどん底に突き落され、さらに暴力を受け、最後に殺された、ということに尽きる。それは単純そのものであるが、彼は偉大である。なぜならば、彼は、すべてのアメリカ青年が、世に出て、公正に自由な行動をし、勤勉と誠実によって財産を築く権利を持つべきであると説いているからだ。彼自身はこの権利を十分行使できなかった。しかし彼の殉死によって、国家革命党は勝ったのだ。その勝利によって、わが国はマルクス主義と国際資本主義の侵略から救われたのだ。

これを聞いた若者たちは歓呼の声をあげるのである。この場面によって作者が意図したことは明らかであろう。重要な要素が二つあると思う。その一はファシズムの危機である。この作品の出版される前年 1933 年には、ヒトラーのナチスドイツが勢力を増大し、12 月にはナチスの一党独裁が確立している。ユダヤ人である作者はその事実を深刻に受け止めたにちがいない。そう考えると、観閲台上の Shagpoke はいつのまにかヒトラーの像に重なってくる。そして主人公 Lem を次第に dismantle す

ることによって、軍事独裁政権の脅威を暗示しているのであろう。その二は、Shagpoke が Lem を偉大であるとする理由の中にある立身出世ないし成功の空しい現実である。Shagpoke は、すべてのアメリカ青年が世に出て、自由に行動し、財産を築く権利を持つべきである、と説いたところに Lem の偉大さがあるという。しかし、われわれの知っている彼はどうか。ヴァーモント州の田舎町から成功への夢を胸に都会を目差した Lem は次々に dismantle され、ついに clown として生命を落としたのではないか。この彼のどこに成功への夢があるだろうか。作者は彼の dismantling に Shagpoke の革シャツ党に象徴される軍事独裁の恐怖と重ねて、「成功への夢」の空虚さを説いているのだ。その際、作者は効果を高めるために種々「成功」に関連する事柄を皮肉っている。また作中人物の名前にある種の意味が込められている場合が多い。本稿の最後にこれらに触れておきたいと思う。

第一に、植民地風室内装飾を持つ古風な家が抵当に取られ、都会の店に見世物になる点、家は成功の象徴たる status symbol であることを思えば、皮肉である。次に Shagpoke Whipple が元大統領であるというが、いまは田舎町の小さな銀行の頭取では from rags to riches の逆である。その彼の結成する革シャツ党の制服があらひ熊の帽子に鹿皮服、モカシン靴にリス撃ち銃とくれば、これは Davy Crockett である。そして、彼はフロンティア精神の具現者であるから、革シャツ党員の制服はフロンティアのイメージと結びつく。しかしこの党は右翼独裁党であるから、フロンティア精神の常識的解釈ではない。また Shagpoke たちがカリフォルニアへ金鉱探しにゆくが、ゴールドラッシュははるか昔のこと、空しい結果は目に見えている。その他にも拾えば見つかるが、以上がとくに目立つ点である。

次に、作中人物の名前であるが、まず主人公を考えてみると、Pitkin は kin to pit で、その通り、彼の人生は pit の連続であった。最後に暗殺という最大の pit にはまったのである。次に Shagpoke Whipple はどうか。shagpoke は shag+poke であり、shag は悪漢、ごろつき、poke は pokeweed (やまごぼう) を連想させる。どうみても元大統領閣下にはそぐわない。また Whipple は whip につながる。これで叩かれるのが主人公である。Lem の頭皮を剥いだインディアン Israel Satinpenny は Israel is as thin as satin and cheap as penny と読める。言うまでもなく Israel はユダヤ人の理想の楽土であるが、その意味にかぶせて、成功への夢の彼岸を象徴するものとして用いているのではないだろうか。

以上に見てきたようなさまざまな技巧は、これまで作品の価値を減じると批判されることが多かった。たしかに、*A Cool Million* には作者の作為が目立つし、作中人

物の出会に偶然が多すぎることは否定できない。しかし、われわれは、「成功への夢」という観点からこの作品を読み直し、さまざまの技巧をその観点から捉え直す必要があるのではなからうか。